

## talk! talk! talk! ミュージシャン・まことさん



### ミュージシャン まことさん

「お茶の間に近いミュージシャン」を目指しながら音楽活動以外にも、数多くのバラエティー番組で活躍中のまことさん。その素顔は意外にも車、時計など、好きなものにはとことんのめり込む熱い人だった。今回、まことさんは「クールピクス775」でデジタルカメラに初挑戦。まことさんの初デジタルカメラ作品や「もの選び」へのこだわり、そして「こだわり人」まことさんならではのデジカメへの要望を一挙公開！

### プロフィール

1968年12月31日大阪府出身。ロックバンド「シャ乱Q」のドラマー。  
1991年第2回NHK-BSヤングバトルでグランプリ受賞。1992年シングル「18ヶ月/お嬢様」でデビュー。その後「上・京・物・語」「シングルベッド」「ズルい女」などヒット曲を連発。  
現在は作詞家として各アーティストへの作品の提供やプロデュース、バラエティー番組への出演など、幅広い分野で活躍している。趣味の車好きが高じて、1999年には富士ル・マン1000Kmの「RMK冷凍めんスーブラ」のチーム監督も務めている。

### デジカメ初挑戦！愛情あふれる身の回りの写真を大公開！

まことさんはデジカメをお使いになるのは初めてなんですよ？

そうなんです。だから、説明書を読むことから始めました。なにせアナログ人間だったので、最初はなかなか大変でしたね（笑）。

記念すべき初撮影は、愛犬のお写真ですね。お名前は？

タロウです。柴犬で、まもなく7ヶ月になる子犬なんです。やんちゃで、撮るのに苦労しました。好奇心が旺盛なんで、起きているときは常にキョロキョロしているんですよ。だから、なかなかフレームにうまく収まってくれないんです。ボタンを押してシャッターが切れるまでのタイムラグの間に動いてしまうし、なかなかいいタイミングで撮れなかったですね。

こちらの植物の写真は？



愛犬・タロウ。  
タロウちゃんのことを愛おしそうに話すまことさんの表情も印象的でした。



奥様が凝っているというガーデニング。緑あふれるパティオはお二人の憩いの場。



まことさん作の巣箱。鳥の訪れが待ち遠しい...

これは、嫁が今凝っているガーデニングです。緑や土、水。鳥が家に来たらいいなと思って巣箱を作って置いてみたりもしますよ（笑）。そういった自然のものに2人とも凝っています。家のパティオにはグリーンを置いて都会にいながらリラックスできる空間を作っています。

今、ガーデニングって流行ってますけど、流行るのがすごくよくわかりますね。やっぱり都会の中でごちんまりと生活していると、知らず知らずのうちに自然のものを求めてしまいますよね。

携帯電話の写真もありますね。

はい。僕の携帯電話なんですけど、今どきこの分厚さ、存在感（笑）。テーブルにも安定してしっかりと立ってしまうというこの重厚感を醸し出して撮ってみました。いまだにメールもできませんが、このグリップ感がなかなかいいんですよ（笑）。今の携帯は小さくって、みんな指先で持っているでしょう。あれ、結構気になるんですよ。これはしっかりと握れる。持ちやすいものが一番でしょう！？

握りやすさといえば、今はフラットタイプなデジカメが流行していますが、このニコンのクールピクス775も手ふれしないようにグリップをきちんと作ってあるんですよ。

あ、たしかに握りやすかったですよ！ そういえば僕の携帯のホールド感と一緒に（笑）！ すごくいいですね、こういうユーザーのことを考えたこだわりは。

今回、初めて初めてデジカメをお使いになって、どんなことをお感じになりましたか？

やっぱり動くものを撮るのが難しいですね。生き物っていうのは予測できない動きをしますから。とくに子犬は動きが活発すぎて難しかったですね。いろいろテクニックを身につければそういうのも克服できるんでしょうけど、まだまだ勉強不足で...

いいところは、撮ったあとすぐチェックして、失敗だと思ったらそのつど消してやり直せるところがすごく便利だと思いましたね。

撮ってみて、どのような失敗が多かったのでしょうか？

うーん、シャッターを押すときはばっちりの構図で撮れたと思ったものでも、改めて見てみると構図のバランスがいろいろと気になってくるんですよ。上下の微妙な間隔だとか、もうちょっと上の景色を多めに、被写体を下の方に持ってきたらよかったですね。



まことさん愛用の携帯電話。  
ホールド感がクールピクス775に似ている！？

あとか...。デジカマだと現像に出してからそういう失敗に気が付くのではなくて、その場でどんどん微妙な調整ができるからいいですね。

ガーデニングの植物の写真にしても、微妙な光の角度によって、色の見え方や感じ方が全然変わってきますね。僕もまだまだそこまでの域には達してませんが、やり始めたら凝ってしまいそうな気がします。

親父はすごくカメラが好きで、実家に行くといつも新しいカメラの自慢なんかをされるんです(笑)。僕の凝り性なところや車好きのところは、きっとそういう親父の血を引いているんです。だからカメラ好きのDNAも間違いなくあるでしょうね。

## まことさんのもの選びの鉄則！「作り手の強い意思が重要」



まことさんの車好きは有名ですが、普段はドライブによく行かれるんですか？

ええ、かなりよく行きますね。日帰りで箱根、芦ノ湖はもちろん、日本アルプスの方にも行ったりします。この前も、まさに天然の名水が湧き出ているようなところに行ってきましたよ。

どんな車がお好きなんですか？

僕はドイツ車が好きですね。僕は車にしても何にしても、作る人がとことんこだわって作ったものが好きなんです。

今、ボルシェに乗っているんですけど、僕が子供の頃に見たあのカエルのようなデザインを頑固に買っているところや、「うちはどんなことがあってもこの形式で進化していくんだ」というポリシーで、エンジンもフラット・シックスという形式を貫き通しているところなんか、たまらなくいいんです。ただ速い車を求めるのであれば、速くて安い車は他にもありますけど、そういう作り手のこだわりが僕にとっては大きな魅力ですね。

車以外のものもそういったこだわりを持って選んでいらっしゃるのですか？

そうですね。コストを抑えて大量生産されたものより「お金をかけてもここにこだわって作りました」という、職人の強い意志や口マンを感じるようなものが好きです。

僕は機械式の時計も大好きなんです。時間を知りたいだけなら、携帯電話についている時計でも構わないわけでしょう。腕時計にしたって、クォーツのほうが安いし正確ですね。機械式の時計は高いものは100万円以上するうえに、1日に何秒、何分と狂ってしまうんですが、作る人のこだわりが随所に感じられる時計なら、それすらも逆に愛しく思っちゃいますね。

そこで僕は機械式時計にもはまってしまって、5、6本持っています。2本買ってしまったら、もうマニアの道まっしぐら(笑)。2本買ったら3本目が欲しくなって、3本を買ったらまた4本目と、次々欲しいものが出てくるんです。もう底なし沼ですね。

車や時計は、新品を買われるんですか？

絶対新品です。あえて中古やアンティークがいいという人もいますが、僕は同じお金を出すなら、ランクを下げてでも新品がいいですね。

それはなぜでしょう？ 新品にこだわる理由は？

うーん、やきもち焼きだからですかね(笑)。異性に対する考え方が一緒ですよ。本当に好きになったものが中古だったら、やきもち焼いちゃうんですよ。「こんなに素晴らしい車に、自分以外の誰か知らない人が乗っていたなんて」って悔しくてたまらなくなりますね。女々しいんです(笑)。「自分だけがこの良さを知っている」って思いたいんですよ。

では、車や時計はまことさんにとって女性のような感じですか？

うーん、深いところでは違いますが、遠いものではないような気がしますね。ただ、女性は複数になるとえらい問題ですからね(笑)。

でも、車やカメラだけでなく何にしても、自分の大切なものは「これ一つ」って決めて、それをずっと持っているのが理想だと思いますね。女性に関して言えば、嫁を一人って決めたのならその人一筋、という風にな。時計はね、結婚を機に3年前に卒業したんですよ。だから、見ると欲しくなるんで時計屋さんには絶対行かないようにしてるんです(笑)。なんでもはまるとどっぷりのめりこんじゃうんで、どこかで歯止めをしないと終わりがないんですよ。

そういう凝り性な部分もやはりお父様の影響を受けていらっしゃるのですか？

完全に受けてますね。僕が子供の頃、親父は「車好きならドイツ車に乗れ」ってよく言ってたんです。今考えるとそれはただ単に親父の好みでしかないんですけど(笑)、その言葉には妙に親父の頑固さが表れていて、僕は好きなんです。そういうものに対するこだわりには、ものすごく影響を受けてますね。

親父はオーディオも好きで、スピーカーも木を切って自分で作ったりしていました。僕が中学生くらいの頃は、みんなソニーのミニコンポとかに憧れていたのに、うちにはティアックのオープンデッキだとかラックスマンのアンプだとか、中学生には全然わからないようなものばかりありました。スピーカーも親父の手作りだし(笑)。

まことさんの「作り手の情熱を重んじる」というこだわりは、きっとそんなお父様の血を受け継いでいるんですね。



## 何かをやりぬくためには“おたくな気持ち”が必要不可欠

まことさんが音楽の道に進んだのも、お父様の影響を受けているのでしょうか？

いや、音楽に関してだけが、唯一親父に反したところなんです。親父は公務員で、安定を求める堅実なタイプだったんです。でも僕は、なんともいえず不安定な、いちかばちかの音楽の道を選びましたから。

ご家族に反対されても、ご自分の夢を一途に貫いたわけですね。

そうですね。でも、最初はかなり反対されましたけど「どうせ飽きるやろ」という親の気持ちか、ある時点から「この子はひよっとしたら本気なのかもしれない」という風に変ったんですね。きっと。その頃からはすごく応援してもらって、ありがたいなあと思ってます。

なんでもそうですけど、親に反対されるよりは応援してもらった方が子供も絶対にうれしいし、努力もする。だからこそ目標に近づけるとおもいますね。

まことさんは、最初からドラムをされていたんですか？

そうですね。本当はギターもやりたかったし、歌も歌いたかったんです。でもやるからにはプロになりたいと思ってたんで、それを考えると、ライバルの多いギターよりもやっている人の少ないドラムの方が抜き出る可能性が高い。そういういやらしい計算もあって(笑)、ドラムにしました。

始める前からプロになるつもりだったんですか？

まさにそうです。僕は昔から野球が好きになるとプロ野球選手になりたい、プラモデルが好きになるとプラモデル屋さんになりたい、漫画が好きになると漫画家になりたい、となってしまう、すごく夢見がちなタイプだったんで(笑)。

でも、ドラムは「もの」としてものすごく面白いんですよ。自分でセッティングして、自分のキャラクターを出せるところがあって、結果的にそういうところはすごく自分に合っていましたね。

僕は楽器っていうのは、どこかおたくでマニアックじゃないとやれないと思うんです。だからこそ時間が経つのを忘れて練習したり、何かについて思いきり調べたりできるんですよ。そのおたくな気持ちがなくなると逆にだめかもしれない。それはきっとカメラにしても何をやるにしても同じでしょうね。



自分の個性が出せるというドラムはまことさんにぴったりの楽器だ。

## デジタルだけアコースティック。そんなデジカマが新しいのでは？

では、「こだわり人」のまことさんの目から見て、こんなデジカマがあったらいいな、というアイデアはありますか？

うーん、デジカメから直接プリントアウトできるのなんて便利でいいなあ。でもそういうのは相当大変なんでしょうね。

あとは、握るところだけが木でできているようなものなんていいですね。グリップだけ木のぬくもりがあるデジカメ。今、デジカメって全体的にサイバーなイメージですよね。だからその先をいって、デジタルだけドアコースティック感のあるものなんてどうでしょう？

たとえば、クラシックな旧式カメラのデザインのデジカメとか？

いや、昔の「なんちゃって」になるんじゃないかと、最新の中でいかに自然のぬくもりを醸し出すか、っていうのがいいですね。

車でも、昔のジャガーの何々型風や、往年のミニクーパー風の軽自動車とかってありますけど、やっぱりそれは見た目がかわいいというだけで深みがあんまり感じられないんですよ。オリジナルには絶対に勝てないし。だからカメラも、このサイバーの中に、今の感性で何かぬくもりを感じさせれば面白いんじゃないかな。僕がこんなことどうこう言うのもおこがましいけれど…。メーカーの方もいろいろ試行錯誤しながら一生懸命開発なさってるんでしょうから。

いえいえ、貴重なご意見をありがとうございます。まことさんは、木のぬくもりを求めたり、家でも鳥の巣箱を置かれたり、普段からナチュラル志向なんですか？

そうですね。でも、僕個人というだけでもなく、時代の流れもそういう意識になっている気がするんですよ。

たとえば映画でも、昔のSF映画の中の未来像っていうのは、車が空を飛んで、モノレールのようなものが空を縦横無尽に行き交っているようなすごくサイバーでメタリックなイメージでしたよね。でも最近の未来映画を観ると、逆に風景も着ているものも今の僕たちとそう変わらないのに、ある一部分だけに最先端のものを取り入れているというものが多いんですよ。そして、僕は世の中は実際にそういう風に進化していく気がするんです。みんながガーデニングに凝ったり、都会でも緑を増やそうという運動があるようにね。

そういう意味でも、自然のぬくもりのあるデジカメなんて新しいんじゃないでしょうか。

なるほど。映画の話になりましたが、今度、まことさんはつくさんがお作りになる映画の予告編の監督をなさるそうですね。もう構想は練っていらっしゃるのですか？

まだ彼の映画の本編自体がどうなるか全く決まっていないので、何も見えてこないですね。でも、やるからには自分の目印みたいなものをちりばめたいと思っています。

僕は音楽にしても何にしても、自分で何かを作るからには、常に自分の目印というか、自分らしさを入れるようにしてます。

写真でもきっとそうだと思いますが、そういう自分らしさが何を作り上げるときにも絶対必要だと思うんです。だから、映画の予告編でも、その短時間の中に僕ならではの味をこめたいですね。たとえばそれが万人には受け入れられなくてもね。中には「なに、これ？」なんて思う人がいるくらいでもいいと思います（笑）。

僕、映画も大好きだから、映像の世界にのめりこんだら、またどんどんはまってしまいそうな自分がすごくわかるんですよ（笑）。だから、あえてカメラも今まで距離を置いてきたところもあるんですけど、でもそろそろ僕もやってみようかな、と思い始めています。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.